

平成 26 年 4 月 17 日、政策秘書課職員との話の内容をお伝えします。

ある講演会で宮城県岩沼市の井口経明市長とご一緒する機会がありました。岩沼市は、被災地の中で最初に復興計画を策定し、また、集団移転が難航する市町が多い中、住民を主体にした議論を行い、いち早く集団移転が進むなど、スピード感ある取組みが行われています。

井口市長は、全国市長会副会長を務められた経験もある方です。その経験の中から「愛知県は税収が豊かで裕福な地域。全国的にもこのような地域は珍しい」という意見を伺いました。また、中国地方の自治体の方にお会いした際にも、同様のことを言われました。この地域で暮らしていると、あまり感じないことかもしれませんが、他県の自治体の多くは、高齢化が進み、税収が減り、本当に困っています。

本市も、今は“若いまち”と言われていますが、いずれ高齢化が一気に加速し、同様な課題に直面します。課題に直面した後に、解決策を探しては、間に合わないのです。困っている全国の自治体では、すでにいろいろな取組みが始まっています。そうした先行する取組みを参考にしながら、市にも市民のみなさんにも余裕がある今のうちに、市民のみなさん同士の支え合い、居場所づくりに取り組んでいきたいのです。

## 葉っぱの力

平成 24 年に行った「長久手市住民意識調査」で次のような結果が出ています。

「今後も長久手市に住み続けたいか」の問いに対し、「住み続けたい」と回答した方が4分の3以上を占めています。「住み続けたい」理由は、「緑や田園が多く自然環境が良い」が最も多く38.1%、次に「交通の便がよい」、「買い物に便利」、「住みなれていて愛着がある」がそれぞれ約30%と続いています。

市では、来年秋にモリコロパークを主会場に行われる「全国都市緑化あいちフェア」の開催地として、道路や学校、保育園などに緑を増やそうと計画しています。住み続けたい理由として、「緑が多い」と挙げる方が約4割いらっしゃいますが、緑は増えてもいいけれど、枯れ葉はイヤだという意見が多いのです。

私たちが生きていくうえでは、酸素が必要です。酸素は、葉っぱが光合成をす

ることによってできます。緑の葉っぱのときは良いけれど、役に立たなくなって枯れ葉になったら疎ましく思うのは、葉っぱだけでなく、どこか人にも当てはまるようで悲しくなります。子どもにとっては、枯れ葉は宝ものです。枯れ葉が重なってカサカサいう道は楽しくて仕方ありません。

先日、文化の家でお会いした演出家の倉本聰氏は、酸素と水という人間にとっていちばん必要な、命の必需品というべきものは、森がつくってくれていると話されていました。現在、彼は、北海道の廃業したゴルフ場を買い取り、ゴルフコースを森に戻す活動をされています。これからは「葉の時代」だとおっしゃっていました。また、昨年、市を訪問された C.W ニコル氏からは「自然欠乏症候群」という言葉を教えてもらいました。自然の中で遊ぶ経験の少ない子の中には、ものごとに集中できない、落ち着きがなくじっとしてられない、友だちとうまく遊べない子どもが増えており、そうした症状は「自然欠乏症候群」として欧米で大変話題になっているそうです。

緑が多いことは、長久手市の魅力の一つです。緑を守り、増やしていくために、一人ひとりができることを考えてみませんか。例えば、市が高齢者の方に枯葉を集めてもらい、そこに対価を支払うという方法もあります。枯葉をせっせと集めることで、元気になってもらい、病気を予防することができれば、国民健康保険の赤字を抑えることができるかもしれません。地域でできることをみんなで考えていきたいのです。

～市長の話を聞いて～

私の家の近所の街路樹には大きな落葉樹があります。秋、近所のおばあちゃんが、一人で枯葉を掃いている姿を何度となく見かけました。「ありがたいなあ」と思いながらも、自分が手伝うことはできませんでした。「いつもありがとうございます」と声をかけるだけでも、その方の気持ちは違ったかもしれません。

あるお寺で、子どもたちに枯葉を集めてもらい、お礼に焼いもを渡しているという新聞記事を読んだこともあります。そうした取組みも参考にしていきたいと思います。